

## 共同研究プロジェクト

# 日本における海外の民間信仰と宗教の習合に関する現状調査—中国ルーツの信仰を中心に 2017年度活動報告

潘 宏立・林 雅清

本研究プロジェクトの中心メンバーである、潘・林（共同研究代表）および研究分担者の安田ひろみ（総合社会学部）の3名は、今年度は本学内において月1回のペースで研究会を開催し、日本における「媽祖信仰」を中心とした中国の民間信仰と、神道や仏教等の日本の宗教との習合に関する調査研究と意見交換を行ってきた。

上半期は先行研究の精査と分析、さらに現在日本国内で媽祖を祀っている場所の特定とそれに関する文献調査を中心に行い、下半期では①国内現地調査や②海外の国際学術シンポジウムへの参加、③研究ノートの執筆等に関する打ち合わせを行った。

①の現地調査は、2017年8月28日と29日の2日間、茨城県の弟橘姫神社・佐波波地祇神社（以上、北茨城市）・弟橘比賣神社・大洗磯前神社（以上、東茨城郡大洗町）・祇園寺（水戸市）・天聖寺墓地（小美玉市）・下津天妃神社（鹿嶋市）等の社寺に上記3名が赴いて、江戸時代に造像されたとされる媽祖像の現物調査や、関係者への聞き取り調査を実施した。調査結果の詳細については、本誌15～21頁掲載の③研究ノート「茨城県内の媽祖関連社寺に関する現状と信仰の実態について」において報告している。なお、今年度の研究経費は、全額①現地調査の旅費の一部として使用した。

②の国際学術シンポジウムは、2017年11月30日～12月3日にかけて開催された、本プロジェクトの研究分担者にも名を連ねている黄瑞国・林明太・曾偉らが所属する莆田学院媽祖文化研究院（中国福建省莆田市）が主催する「第2回

世界媽祖文化フォーラム」並びに「第3回国際媽祖文化学術シンポジウム」であり、主催者より潘・林・安田が招聘される形で参加した。3名は主催者から第3回国際媽祖文化学術シンポジウムにおいて分科会報告を行うよう依頼があり、潘・林が「日本の茨城県における媽祖関連の社寺の現状」と題する報告を、また、安田は「韓国の中華街における媽祖信仰の現状」と題する報告を行う予定で事前に原稿を送っていたが、当日、本研究グループが「大会発言」としてシンポジウムの全体会で発表することを求められたため、潘・林の報告を急遽「日本媽祖信仰的分类和現状—以茨城县的天妃神社和曹洞宗寺院调查为例—（日本の媽祖信仰の分類と現状—茨城県の天妃神社と曹洞宗寺院の調査を例に—）」と題して安田を含めた3名による報告として発表したところ、主催者から「優秀論文賞」として表彰された。なお、安田の分科会報告「韓国の中華街における媽祖信仰の現状」は予定通り行い、同行した本学大学院生の鄭星瑤が通訳を務めた。

一連の調査および国際シンポジウムへの参加を通して、一部ではあるが日本における媽祖信仰の歴史と現状について再検証することができ、一定の成果は挙げられたが、日本における媽祖信仰について体系的に論ずるためには、改めて調査すべき地域がまだ日本各地に複数存在し、また媽祖に関する祭事やその他の民間信仰・宗教との関わりについても掘り下げて調査する必要もある。そのため、今後も本研究プロジェクトを継続させることができれば、上記に関するより体系的な研究成果が期待できると思われる。